

先 人

1 ^{は せ が わ し ん え も ん} 長谷川新右衛門（1531年～1612年）

沼隈は、古くから^{たたみおもて}畳表を織ることが盛んな土地でした。畳表の原料のい草を織るのは、大変な苦勞でした。

約400年前、沼隈郡山南村（現在の福山市沼隈町山南）でくらしていた長谷川新右衛門は、短い草を捨て、長い草だけで、苦勞して畳表を織っている農家の人々をみて、「短い草だけでも織ることはできないか。」と研究を重ねました。そして、ついに畳表の中央で短い草をつなぐ「中つぎ表」を発明しました。

これにより、畳表の生産量は大きく増加しました。この畳表は、「備後表」として、備後の特産物となっていました。



〔長谷川新右衛門の墓〕

2 ^{みず の かつなり} 水野勝成（1564年～1651年）

私たちの町の^{きそ}基礎は、約400年前に、水野勝成によって築されました。

水野勝成は1564年（永禄7年）^{えいろく}三河国（今の愛知県）^{みかわのくに}に生まれました。江戸幕府を築いた徳川家康とは、いとこの関係です。勝成が21歳のとき、父親から親子の縁を切られ放浪の旅に出ます。その放浪中に、この備後の地にも来たことがありました。その後、家康のはからいで父親と仲直りし、刈屋（今の愛知県）城主になり、1619年（元和5年）には、備後^{えん}十^ご万石の領主となりました。

当時、備後地方の中心の城であった神辺城（現在の神辺町川北・川南）に代えて、現在の福山城がある常興寺山に新たな城を築きました。これは海にも近く、陸路にも近い所だったからです。その城を中心につくられた町が今の福山です。

勝成は、福山藩主になってから福山の町の開発や発展に努めました。福山の町は海に近いので、井戸を掘っても塩水が出てきます。そこで、芦田川の水を町にひく上水道の工事をし水が飲めるようにしました。

また、自ら開墾した土地を無料で与えることで農民や商人などを集めて産業の発展につなげました。特に、い草や木綿の生産を進めます。い草から作られる畳は「備後表」と呼ばれ、全国で最高級品として知られました。木綿の生産はのちの「^{びん ご がすり}備後絣」につながりました。



〔水野勝成像（福山城跡）〕

芦田川は大雨が降ると氾濫^{はんらん}していたので、川に堤防^{ていぼう}をつくるなどの治水工事を行ったり、新田を増やすために春日大池，服部大池，瀬戸大池の開発を行ったりしました。その他，小さな用水池や水路もつくり，福山の人たちが豊かにくらするようにしていきました。

1651年（慶安^{けいあん}4年），福山城内において88歳で亡くなりました。賢忠寺^{けんちゅうじ}にお墓がつけられています。



〔水野勝成の墓（賢忠寺）〕

3 本庄重政^{ほんじょうしげまさ}（1606年～1675年）

本庄重政は，尾張^{おわり}の国（現在の愛知県）に生まれました。青年^この頃は地方を旅してまわり，赤穂藩^{あこう}（現在の兵庫県）で塩作りを学びました。

福山藩に移り，松永の遠浅の海に塩田をつくることを藩に申し出て認められ，8年間かけて干拓地^{かんたくち}を完成させました。

松永の塩作りはその後，約300年続き，“塩の町松永”の発展を支えました。

松永の父とも呼ばれており，松永駅前には，銅像が建てられています。



〔本庄重政銅像〕

4 菅茶山^{かんちやざん}（1748年～1827年）

菅茶山は今の福山市神辺町に生まれ，19歳の時，京都に出て医学や儒教（中国の学問）の考えを元にした朱子学^{しゅしきがく}を学びました。

1781年（天明元年）故郷^{もど}に戻り，学問を志す人々のために教育の場として「黄葉夕陽村舎^{こうようせきやうそんしゃ}」という塾^{じゅく}をつくりました。それが1796年（寛政8年）に郷校^{ごうこう}「神辺学問所」（通称「廉塾^{れん}」）になりました。



〔菅茶山像〕



〔廉塾講堂〕



〔廉塾講堂の竹縁・方円の手水鉢〕



ばらのまち福山
イメージキャラクター
「ローラ」

手水鉢の○と□の形には、「水は入れ物によってどんな形にもかわる。人も教育によって、良くも悪くもなる。」という意味が込められているそうだよ。

菅茶山は漢詩（漢字だけでつくられた詩）をつくることに優れていました。

茶山が生涯につくった漢詩は2400首余りにおよび、1812年（文化9年）に出された詩集「黄葉夕陽村舎詩」（全13巻）に収められ、当時のベストセラーになりました。

ふるさと豆知識

茶山ポエム

茶山が詠んだ元々の漢詩の意味を大切にしつつ、茶山がながめた景色を思い浮かべられるような現代詩に書きかえて親んでいるもの。

「画山水」
溪村三五戸
一向絶風塵
自種梅花後
春来引外人
(よみかた)
けいそん
さんごこ
いっこう
ふうじんをたつ
ばいかを
うえしのちより
しゅんらい
がいじんをひく

(意味)

谷間の三～五戸の寒村、全く世外の仙境だ。それが梅花を植えてからこのかた、春になれば方々から花見客を呼ぶ。

「梅」
山の谷間の奥深く
小さい村があったんだ
家は四、五軒 さみしいな
だれも来ないよ さみしいな
ところが村人 梅の木植えた
それから後の 谷間の春は
花見の人で 大にぎわい

〔茶山ポエム〕

5 阿部正弘 (1819年~1857年)

日本が大混乱の時に、将来のことを考えて大きな決断をした人物が阿部正弘です。

阿部正弘は1819年(文政2年)に江戸で生まれました。1836年(天保7年)に第13代福山藩主になり、翌年、それまでくらしていた江戸から福山にお国入りしました。正弘が子どもの頃からとても優秀であったことを、第12代将軍であった徳川家慶は評価していました。そうしたこともあって、25歳という若さで老中に就きました。

阿部正弘は、12年間江戸幕府の老中首座(現在の内閣総理大臣)という役職を務めました。正弘が老中になった頃、日本は鎖国を行い、オランダ・中国・朝鮮といった限られた国としか交易をしていませんでした。しかし、アメリカやイギリス、ロシアなどの多くの外国船が日本にやって来て、交易することを求めてきました。阿



〔阿部正弘肖像画〕

部正弘は、政治のリーダーとして、次々とやってくる外国からの交易を求める声に対応するために日本国中をまとめようとしてしました。そのため、これまで老中の考えを中心に進めていた政治を、様々な役職の人たちから意見を集めながら重要な問題を考えるようにしました。

特に、1853年(嘉永6年)アメリカのペリー来航時には、全国の藩主に意見を求めました。正弘は、様々な意見を参考にしながら、日米和親条約を結ぶことを決断したのです。

また、日本が混乱した中で、日本をほかの外国と同じくらいの力を持った国にするため、有能な人を育てていく必要性を感じ、1855年(安政2年)、福山藩の藩校「弘道館」を「誠之館」と改め、身分に関係なく弓、槍、剣術などの武芸や国学、洋学、医学などの文芸を学ばせました。このように、正弘は江戸幕府で長い間続いた鎖国体制を終わらせ、開国を決断するとともに、日本の将来のことを考えて、政治の仕組みを変えたり、次の時代を担う人を育てたりして、現在の国際社会のもとを築きました。

阿部正弘は、勝海舟を登用し、開国後、海軍伝習所をつくって、国防に力を入れたんだよ。
坂本龍馬もそこで学んでいたよ。



ふるさと豆知識

阿部正弘が福山藩の重役たちに言った言葉

このたびの浦賀にペリーが来航したことは、各々みんなが知るころである。時が移り、国家が盛衰するのは古来まぬがれないところであるが、今のまま放っておくわけにはいかない。今日の国力衰退を思うと身につまされる思いがする。

外国の圧力に屈しないためにも幕政改革を進めなければならない。まず、わが藩から文武を引き立てて、みんなの士気を高めるためにも教育制度改革を行う。

6 くぼ た じろう 窪田次郎 (1835年～1902年)

わたしたちは現在、学校で誰もが平等に教育を受けることができます。それは、1872年(明治5年)に明治政府によって「学制」が出されたからです。この学制に大きな影響^{えいきょう}を与えた人が福山出身の窪田次郎です。

次郎は1835年(天保6年)に安那郡栗根村^{やす な あわ ね}(現在の福山市加茂町)の医者^{いしや}の家に生まれ、自分も医者になるために大阪に出て多くの先生に学びました。1861年(文久元年^{ぶんきゅう})に栗根村^{もど}に戻り、翌年から父に代わって村の人たちの医療活動^{いりょう}を始めました。

次郎は1871年(明治4年)に、生まれた家や身分に^{だれ}関係なく誰もが教育を受けることのできる啓蒙所^{けいもうしょ}を設置しました。この啓蒙所が後の小学校へつながっていきます。また、バセドー氏病の発見や日本住血吸虫やコレラの研究に努めたりするなど医療、衛生、政治などいろいろな分野^{かつやく}で活躍しました。

次郎は、人間が人間らしく生きるためには「衛生」「資産」「品行」が大切であるという考え方を持っていました。「衛生」とは、「生」を「衛^{まも}」る、つまり、人間が天から与えられた生命^{まこと}を生きて全うすることです。この「衛生」を全うするために「資産」、つまりお金が必要であり、「資産」を維持^{いじ}するためには「品行」、つまり正しい行いが必要です。これらは、一人一人の個人の問題ではなく、国や社会全体の問題であると考えていました。そこで、「資産」を維持^{いじ}するためには政治経済が重要であること、「品行」を正すためには教育が重要であると考え、次郎は医療活動のほかにも様々なことに取り組むようになりました。

1つ目は1871年(明治4年)栗根村で「民会^{みんかい}」という、日本で初めての選挙による村議会を開きました。こうした動きは、やがて自由民権運動として国会開設の要求につながっていきます。

2つ目は1872年(明治5年)岡山県の笠岡^{かさおか}を中心に「細謹社^{さいきんしゃ}」という本屋を開きました。都会と比べると地方にくらす人たちは新しい本をなかなか手に入れることができません。誰でも本を読めるように、本屋を開きました。

3つ目は1873年(明治6年)栗根村で「博聞会^{はくぶんかい}」という談話会^{だんわ}を開き、村の人が集まって意見や知識の交換^{こうかん}をできる場を作りました。

そのほかには、啓蒙所の設置や医者を育てるための医会・今の保健所にあたる衛生会の設立など、日本全体のことを考え、自分が地域でできることを行動にしていきました。

人間は誰もが平等であり、身分や男女差別が許されないという信条で、政治や経済、教育などの活動を行う次郎の考え方は明治政府の考え方と合わないところもありましたが、戦後つくられた日本国憲法には次郎の考え方が大きく反映されています。



〔窪田次郎〕

7 やまもとたきの すけ 山本瀧之助（1873年～1931年）

山本瀧之助は今の福山市沼隈町に生まれました。一時は東京で勉強することを夢見ましたが、16歳の時に地元の小学校の先生になりました。

瀧之助は日本の文明化のために、福山の青年を育てようと青年会をつくりました。当時は青年といえば立身出世をめざす都会の青年のみを意味しました。しかし、田舎にも文明化に目覚めた青年がいることを主張し、青年会をつくりました。青年会では勉強会やボランティア活動などを行い、その考え方や活動を全国へ広めました。

瀧之助は、「1日の中に少なくとも何か1つはぜひ善いことをしよう。」という「一日一善」を進めました。そのことを、日記に書くことで自分の達成感を高め、さらに未来の成すべきことを考えることにつなげようとしてしました。また、その日記を順番にまわして読むグループをつくりました（巡回日記）。日記を回し読むことで、お互いの考え方や行動から学び合うとともに、青年会員同士の絆や信頼関係を強めることをめざしました。

また、瀧之助は全国各地に足を運び、青年リーダー養成を目的として、1都2府39県で開催された全国青年講習会で、120回にわたって講師として指導を行いました。

この講習会では、人と人との交わりを大切に、2～5日間寝食をともにし、車座になって研修を深めました。講習生は延べ5000人を超えました。瀧之助は「青年の父」と尊敬されながら、1931年（昭和6年）、58歳の生涯をとじました。



〔山本瀧之助〕



〔車座になったの講習会〕

ふるさと豆知識

瀧之助の著書

『田舎青年』 23歳で著した「田舎にすむ学校の肩書きなき青年もひとしく青年なり」という書き出しで始まる。青年運動のバイブル的な存在として広く読まれました。

『良民』 地方青年向けの雑誌として1911年（明治44年）から約10年間発行されました。青年の自覚と修養を勧める内容の雑誌です。



8 葛原^{くずはら}勾当（1812年～1882年）

9 葛原しげる（1886年～1961年）

安那郡^{や ひろむら}八尋村（現在の福山市神辺町八尋）出身の葛原勾当は、江戸時代の終わり頃^{ごろ}の文化人で、盲目^{もうもく}の琴^{こと}の名手です。勾当は、自ら考えた木活字による印刷用具（県の重要文化財）を使って、46年間日記を書き続けました。

また、葛原しげるは、勾当の孫にあたり、「夕日」や「とんび」を始めとする多くの童謡^{どうよう}とともに、400を超える校歌^こを作りました。しげるは、「いつもにこにこぴんぴん」をモットーとしており、今でも、しげるの命日である12月7日には、地元の竹尋小^{たけひろ}学校で「ニコピン祭」^{かいさい}が開催されています。



〔葛原勾当〕



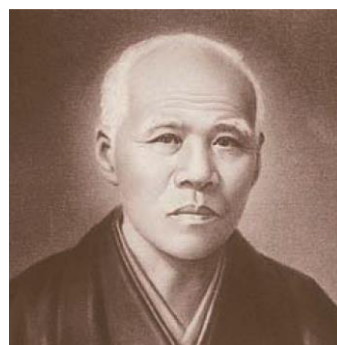
〔葛原しげる〕

10 丸山^{まるやま}茂助^{も すけ}（1853年～1917年）

丸山茂助は、沼隈郡松永村（現在の福山市松永町）に生まれました。

茂助は、1878年（明治11年）に、下駄^{げ た}を売る店を開きました。その店は、2～3人の職人^{きり}で桐の下駄を作^きって売っていました。下駄を作るには、桐の木が適^きしていましたが、福山の近くには、使えるような木がありませんでした。そこで、山陰地方^{さんいん}や北海道^{からふと}、樺太（ロシア）まで木を探しに行ったそうです。そして、桐と同じような肌ざわり^{はだ}で、安いアブラギという木を見つけ、船で松永に運び、下駄の材料にしました。

そのような努力もあって、“松永の下駄”の名は、全国に広まりました。



〔丸山茂助〕

11 井伏^{い ぶ}鱒二^{せす じ}（1898年～1993年）

井伏鱒二は1898年（明治31年）に安那郡加茂村（現在の福山市加茂町）に4人きょうだいの二男として生まれました。高校生の頃から絵が好きで、画家を志していましたが、兄の勧め^{すす}もあり、大学に入った頃から小説を書き始めました。

戦争中は陸軍に動員され、シンガポールで新聞の編集をしていました。その経験^{えい きよう}がその後の作品に大きな影響^{あた}を与えています。



〔井伏鱒二〕

そして1993年（平成5年）7月、95歳で生涯をとじました。

井伏鱒二の作品は小説、随筆、紀行、詩、童話、翻訳など大変幅広いものがあります。鱒二の作品には300点を越える、郷土を題材にしたものがあります。瀬戸内の島々（広島・岡山・山口・兵庫・四国）を題材にしたもの、郷土の人物を題材にしたもの、備後を題材としたもの、福山を題材としたものなどです。特に福山を題材にした作品は、190編以上もあります。鱒二が郷土を心から愛していたことが感じられます。

1965年（昭和40年）から雑誌に連載された作品「黒い雨」は、原爆投下後に降った放射能を含んだ黒い雨に打たれ、その後に原爆症に苦しむ矢須子を気遣う、叔父の閑間重松が書く被爆手記で、家族のいたわりと同時に被爆者の悲しみを描いた作品です。

この作品で昭和41年度「野間文芸賞」を受賞しています。



鱒二は、『走れメロス』を書いた太宰治から師と尊敬され、彼の作品に影響を与えたそうだよ。

ふるさと豆知識

鱒二は釣り好き？

井伏鱒二は、本名は「満寿二」という漢字を使います。鱒二は大変釣り好きでした。特に川釣りを好んでいました。そこで自分のペンネームを「鱒二」にしたようです。「川釣り」「釣師・釣場」などの随筆集や釣りにちなんだ作品も多くあります。釣りだけでなく、鱒二にはいろいろと好きなことや趣味があったようです。それを調べて鱒二の人柄に迫ってみてはどうでしょう。



12 木下夕爾（1914年～1965年）

木下夕爾は、深安郡御幸村（現在の福山市御幸町）に生まれました。

大学で薬学の勉強をし、父の跡を継いで薬局を営んでいました。高校生の頃から詩を作り始め、児童詩集「ひばりのす」など数多くの詩集や俳句の本を出しています。

福山市内の小中学校を中心に、多くの校歌の歌詞も作り、たくさんのお子どもたちに歌い継がれています。



〔木下夕爾〕